

ありがとうのリレー

小 五

ぼくは、毎週クライミングをがんばっています。クライミングでは、コーチにしかられながらも、楽しみながらいろいろなことを学んでいます。

コーチが、

「これをやって。」

と言ったとき、ぼくは、いつも決まって、「はい。」

と返事をします。ですが、実は何をしたらよいか分からないときもあります。そんなときでも、返事をしてしまいます。それは、コーチに質問する勇気がないからです。

あるとき、また、コーチから指示があ

りました。ぼくは、いつものように、「はい。」

と返事をしました。ぼくは、「周りの人を見ながら、まねをすればだいじょうぶだろう。」と思っていました。でも、そうはいかず、ぼくは、「何をすればいいんだっけ……。」とこまってしまいました。すると、Aさんが、

「あの黄色いホールドを使って登って行けばいいんだよ。」

と声をかけてくれたのです。ぼくが、「何をすればいいんだっけ。」と聞いてもいないのに、Aさんは、コーチの言ったことを分かりやすく、全て教えてくれました。ぼくは、ちよつとびっくりしましたが、うれしくて、

「ありがとう。」

と言いました。ぼくはAさんのおかげで、

コーチの言ったことをちゃんとやる
とができました。

それから何日かたったある日、ぼく
たちのクライミングスクールに、体験の
子たちが来て、参加していました。コ
ーチは、ぼくたちに、

「体験の子たちのお手本になるよ
うに。」
と言いました。コーチは、体験の子
たちを少しずつ見ていました。ぼくは、
コーチが見ていない体験グループの
中に、こまったような顔をしている
子がいることに気がきました。ぼくは、
「あの子、何かこまっているのかな。」
と思い、

「だいじょうぶ。」
と声をかけてみました。するとその
子は、
「何をやればいいの。」

と、ぼくに聞きました。そのときぼ
くは、
前にやることを教えてくれたAさ
んの

ことを思い出しました。そして、
その子にやることをできるだけ
いいねに教ええました。その子
はぼくに、

「ありがとう。」

と言ってくれました。そのしゅん
間、ぼくの心はなんだか温ま
ってきました。

「ありがとう、という言葉は、
とても大事なんだな。」と感
じました。そして、

「Aさんからもらった親切の
バトンを次の人にわたすことが
できたのかな。」
と思いました。親切のバト
ンって、不思議な感じですが、
ぼくの心はふわっとしました。

ぼくは、「こうやって、小さな
親切や思いやりが、人から人
へとどんどん広がって、広ま
っていったらすばらしいだ
ろうな。」と思いました。これ
からも、こまっている人を見
かけたら、自分から

声をかけていきたいと思いました。親切
のバトンをつないで、ありがとうございます。
ーをしていききたいです。